

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

編集後記

雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	18
ページ	304-304
発行年	1994-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020459

〔編集後記〕

今号が三〇〇頁を越えたのは「江戸初期能番組七種」を付載したことが主因であるが、演能記録調査研究グループの名のこの報告は、実質は能楽研究所の仕事である。能楽研究所は資料を蒐集して内容を充実する段階から、蒐集した資料を能楽研究全般に寄与する形で活用することに仕事の重点を移しつつある。私立大学のきびしい財政だけが原因ではない。学界がそれを要請していると判断してのことである。その見地から着手した仕事の一つが演能記録の整理で、大型コンピュータを持つ国文学研究資料館と提携しての共同研究であるが、主体は能楽研究所であり、科学研究費で購入したパソコン等も研究所に帰属している。能楽研究所の仕事に所員以外の研究者の協力を仰いでいるのである。次号も次々号も同じ形で掲載するであろう。早くパソコンに習熟しなければと、大量のデータを処理するこの仕事に従事して痛感している。

2月になって原稿が揃うのが例年のことであり、遅れを取り戻すため電算写植による印刷の方法を採っているので、原稿はすべてパソコンかワープロに打ち込まなければならぬ。遅れに遅れた落合所員の原稿は末部を私が打ち込んだが、その内容は私の見解への反論が大きな比重を占めていた。まずい論なら腹の立つことであるが、不愉快でなかったのは犬王研究の画期的な成果なるがゆえであらう。

懸案だった展望を、遅ればせながら今号で幾らか進展させた。研究展望は岩崎・田口両所員に一年分を担当してもらっ

たが、所員二人が交替で同じ形をあと二年続ければ遅れを取り戻せる。ぜひそうしたいものである。能界展望は西野所員が五年分をまとめて片付けてくれた。「古今謡曲総覧」には曲名索引——段組印刷は私が担当し、誤脱修正のたびに組み直した。追加は入稿後発見の分——の不備をはじめ不満が多いが、展望の労は多とする。彙報も二年分である。

冒頭の拙稿は論文が落合分だけになりそうなので2月になって急遽執筆したものである。「江戸初期能番組七種」の最終整理に追われながらも論文をまとめるのは、まさに年の功であらう。これが私の能楽研究所所長時代最後の論考になる。この編集後記も最後になってほしいものである。(表章)

一九九四年三月三十日 発行

能 楽 研 究 第十八号

102 東京都千代田区富士見二―一七―一
〇三三二六四一九八二五、三三三二六四一六七二七
〔FAX〕〇三三三二六四一九六〇七

編集兼 野上 法政大学能楽研究所
発行者 記念 表 章

所長

印刷所 三和印刷株式会社
長野市川中島町一八二二一